

ハイデルベルク信仰問答講解説教 27 「選びが先か信仰が先か」(2012年3月4日 礼拝説教)

【聖書箇所】

そして今、わたしの僕ヤコブよ／わたしの選んだイスラエルよ、聞け。あなたを造り、母の胎内に形づくり／あなたを助ける主は、こう言われる。恐れるな、わたしの僕ヤコブよ。わたしの選んだエシュルンよ。わたしは乾いている地に水を注ぎ／乾いた土地に流れを与える。あなたの子孫にわたしの霊を注ぎ／あなたの末にわたしの祝福を与える。(イザヤ44：1-3)

人々はこれを聞いて大いに心を打たれ、ペトロとほかの使徒たちに、「兄弟たち、わたしたちはどうしたらよいのですか」と言った。すると、ペトロは彼らに言った。「悔い改めなさい。めいめい、イエス・キリストの名によって洗礼を受け、罪を赦していただきなさい。そうすれば、賜物として聖霊を受けます。この約束は、あなたがたにも、あなたがたの子供にも、遠くにいるすべての人にも、つまり、わたしたちの神である主が招いてくださる者ならだれにでも、与えられているものなのです。」ペトロは、このほかにもいろいろ話をして、力強く証しをし、「邪悪なこの時代から救われなさい」と勧めていた。ペトロの言葉を受け入れた人々は洗礼を受け、その日に三千人ほどが仲間に加わった。彼らは、使徒の教え、相互の交わり、パンを裂くこと、祈ることに熱心であった。

(使徒言行録2：37-42)

【説教】

今日の信仰問答では、小児洗礼(幼児洗礼)のことが扱われています。今日はここに集中したい。そして皆さんにもこの機会に小児洗礼のことを考えてほしいと思います。この小児洗礼については認める教会と認めない教会があります。この錦ヶ丘教会では、プロテスタントの中でも改革派の伝統に立ちますので積極的に小児洗礼を認める立場にありますが、おそろく皆さんの中にはそういうことに理解ができないという人もいらっしゃるでしょう。かくいうわたくしも、小児洗礼の伝統にない教会の牧師の家庭に生まれ育ちましたので、わたくしは小児洗礼を受けていません。先週の説教でも触れましたように高校2年生の時に所謂成人洗礼、これは小児洗礼と区別するものとして用いる言い方ですが、自分で信仰を言い表して洗礼を受けました。しかしこのわたくしが牧師として召された教会で小児洗礼を授けます。それはそういう教会に遣わされたのだから仕方がないということでしょうか。「郷に入れば郷に従え」でそうしているのでしょうか。わたくしとしては性格上そのように無批判的にこれを行うことはできません。牧師としてこの洗礼の恵みに目が開かれてこそ、心から行えることだと思います。

わたしたちの日本基督教団は合同教会で様々な教派がありますから、この手の話題を牧師会であげれば、すぐにも論争になるでしょう。この熊本地区に限って言えば、小児洗礼を認める教会は教団では教派的には錦ヶ丘、合志豊岡、荒尾くらいかもしれません。少ないのです。昨年、子どもたちの合同のキャンプをした時に、少しこの話題になりまして、市内の某組合教会の牧師は、自分は小児洗礼を認めない、それは子どもの自由だからとはっきりとしかも少し強い口調で述べていました。信仰は押しつけではないと言うのです。でもその自信たっぷりの言葉を聞きながらわたくしは「子どもの自由」という言葉と「押しつけ」という言葉が頭の中を巡っておりました。果たしてそうなのか。小児洗礼を授けることは、子どもから信仰の自由を奪うことなのか。またそれは子どもに無理矢理親の信仰を押しつけているということなのか。

ここでまず押さえてほしいことですが、小児洗礼と成人洗礼、洗礼に二種類あるのかという誤解を生んでしまいます。はっきり申し上げてそういう区別はありません。洗礼は一つであります。ただ受ける時期が幼児であるか、自覚的に信仰を言い表せる年齢であるかの違いだけであります。ですから小児洗礼が何か不完全なものであるとか、大きくなってから信仰告白をして初めてその洗礼が有効になるとかというものではありません。そこを気をつけていただきたい。ただ言葉の問題としてこの説教では「小児洗礼」という呼び方をします。

しかしこのような考え方、つまり小児洗礼を不完全なもの

とする考えは、宗教改革の時代から教会の中でありまして、所謂「再洗礼」というものを施すことも起こりました。当時、教会は小児洗礼を授けることが主流でした。しかしこれに疑問をもった人たちが、やがて自覚的に信仰を言い表すようになってからもう一度洗礼を受け直すということをした。これを行った教派を「再洗礼派」と呼びまして、カトリック、プロテスタント双方から激しく弾圧されるのですが、その流れからバプテスト教会、メノナイト、クエーカーと呼ばれるグループが生まれます。

先ほどのメソジスト教会も既成の英国教会から生まれます。18世紀にジョン・ウエスレー、チャールズ・ウエスレーという兄弟が始めたものです。この流れはアメリカにも渡りましてホーリネス教会、救世軍などが生まれます。また同じく英国教会から生まれたものにピューリタン(清教徒)と呼ばれる人たちがいます。世界史で必ず出る清教徒革命を起こして分離し、やがてメイフラワー号で新大陸アメリカに渡り開拓した人たちです。そこで会衆派、組合教会が生まれます。

何を言いたいのかというと、宗教改革以後、プロテスタント教会は様々な教派に分かれていきますが、彼らが共通して求めていたことは自覚的信仰です。ローマカトリックもルター派も改革派も、英国教会も小児洗礼を認めます。でもそれに抵抗し生まれてくる教派はいずれも小児洗礼を認めない。それよりも自覚的な信仰を重視するのです。わたくしはこれだけでもかなり充実した論文が書けるくらいのテーマだと思っています。お気づきでしょうか。小児洗礼の是非をめぐっては既成の教会、その制度への抵抗が背景にあるのです。

これには、例えば当時の教会が小児洗礼を授ければ自動的に救われるとか、その洗礼の意味を無内容化してしまったことへの抵抗があったとわたくしは考えます。そういう既成教会への抵抗、形式化、無内容化していくことへの批判、抵抗でもあった。制度というのは、そこに落ち着き、無反省にただ受け入れられていると、惰性的になり、形式化していきます。小児洗礼もそのように、ただ教会の組織を維持するために行われているとすれば、それこそ批判、抵抗的になるだけでしょう。教会は絶えずその制度に対する信仰的見直し、検証をしていかなければなりません。

ただ一方でわたくしは、わたしたち改革派の教会が、ローマカトリックに対してあれだけ激しい改革運動をしていながら、どうして小児洗礼は残したのかということが気になります。偶然にも先週、壮年会の学びでアルミニウス主義のことが出まして、わたくしは今日の説教のことも頭にありましたから、「ああ、

これか」と内心思いました。簡単に申しますと、宗教改革の時代に、オランダの神学者にアルミニウスという人がいて、彼が改革派の教理である「予定論」を修正しようとしていました。予定論というのは、一言で言えば、神さまがわたしたちを救いのために選び、予め定めておられるという教理です。それは救いの主体、決定権はどこまでも神さまにあるとする教理なのですが、アルミニウスはここに修正を加える。つまり神さまの決定よりも人間の自覚的な信仰、理性、自由意志、責任を強調するのです。信仰を持つか否かは、人間の自由な意思の決定に基づくものであって、そこに神さまの介入、選びはない。そこから人間の救いに関して神さまと人間は共同する、協力するという一つの考え方が生まれます。この教えが、やがて近代の人間の理性を主張する啓蒙主義の影響もあって急速に広まります。メソジスト運動もこれを受け入れ、ホーリネスもこのアルミニウス主義をはっきりと掲げます。

ところが改革派はこれに激しく抵抗するのです。そしてドルト信仰基準という、言わば一つの信仰告白を制定します。それは五項目ありまして、その頭文字をあわせて「チューリップ」と呼んだりします。とてもかわいいたの花の名前ですが、内容はこのアルミニウス主義を徹底して批判するものです。これに触れる暇はありませんが、簡単に申しますと、人間は全く罪に汚れていて、自力では救いを得ることはできない。しかしその人間を神さまは無条件で選び救われる。そこにはわたしたち人間の側の意志や行いは関係ない。神さまの選びこそが救いの根拠だということです。

もし救いの根拠が人間の自由な意思決定に基づいているのなら、その救いは非常に心もとないものになってしまうでしょう。人間はそれほど強い意志をもって神さまを信じることができるのでしょうか。それこそその不信仰を日々悔い改めなければならぬ存在ではないのでしょうか。よく「子どもが洗礼の意味を分かるまで」とか「子どもが自分で決断できるようになるまで」という言い方があります。まさに自覚的な信仰を求めるのですが、その自覚とはどれほどのものなのでしょう。大人になれば何を知って、どのように感じるのか。それが大人と子どもと一体どのような差があるというのでしょうか。教会学校で子どもたちと接しているとしばしば子どもの方が分かっているように感じる場合があります。幼子だからこそ分かる、純粋に神さまに委ねることができる。そういう面では大人以上ではないか。主イエスも言われました。「幼子のようにならなければならない」と。これは単なる譬えではありません。真理です。

でも例えば聖書に「信じて洗礼を受ける者は救われる」(マルコ16:16)とあるではないか。また今日の教会学校の説教ではマタイ16:16「あなたはメシア、生ける神の子です」とペトロが信仰を言い表した。それが天国の鍵になった。だからやはり信仰が必要だと。けれどもその告白をしたペトロはどうであったか。その告白をしたすぐ後で主イエスから「退け、サタン」と叱責されるのです。最後は主イエスを否定し、見捨てて逃げってしまうのです。弟子たちはみんなそうでした。彼らの信仰とは何でしょう。それは主イエスに見る目がなかったということでしょうか。でも主イエスは彼らを選ばれたのです。だから選ばないのではない。もう初めから選んでおられた。そしてその弱い弟子たちを見捨てず天の国の鍵を託すのです。神さまの救いは、わたしたちが何かその条件を満たしたからなされるのではない。それは一方的な選びであり恵みなのです。それにわたしたちが何か介入したり、協力したりするのではない。それなら救いは自分の功績となってしまいます。

主イエスは「あなたがたがわたしを選んだのではない。わたしがあなたがたを選んだ」(ヨハネ15:16)と言われます。そこには先行する選びがあります。わたしが信じたから神さまは選んでくださるのではない。選んでくださったから、わたしは信じるのです。そもそも信仰も神さまが与えてくださらなければわたしたちの中には生じない。あのペトロの告白も「あなたにこのことを現したのは、人間ではなく、わたしの天の父な

のだ」と主イエスは言われます。今日の間答にも「信仰を生み出される聖霊」とあります。聖霊が働かなければわたしたちはイエスを主と告白することはできません。ゆえにすべては神さまの御業であります。

そしてこの選びで言うならば、一つだけそれは信仰者の親に授かった子どもである必要があります。そこには見えない神の民の系譜があります。子どもは親を選んで生まれてくることはできません。その家庭に生まれることには深い選びがあります。イザヤ書で「わたしの選んだイスラエルよ、聞け。あなたを造り、母の胎内に形づくり、あなたを助ける主は言われる」エレミヤ書では「わたしはあなたを母の胎内に造る前からあなたを知っていた」(1:4)とあります。わたしたちの出生は偶然ではない。神さまの選びがあります。その選びをあらわすしるしとして旧約の民は割礼を施しました。神の民のしるしです。そのような深い選びの中で、恵みの中で子どもたちが育つことを教会は望んでいます。

子どもをスイミングスクールに通わせる人がおります。聞いた話ですが、泳ぎを覚えるのは赤ちゃんであればあるほどよいということです。そういえば赤ちゃんは母親のお腹の中で水の中にいたのです。でも成長するに従って、知恵が付き、恐れが芽生え、だんだん泳ぐことができなくなる。水の中にいたことを忘れる。でも赤ちゃんは本来水の中で自由なのです。それを妨げているのはむしろ周りの人間です。その結果泳げなくなる。自由でなくなるのです。小児洗礼は子どもから自由を奪うのでしょうか。そうではありません。むしろ神さまの中に解き放つことです。水の中にいたことを覚えさせることです。そこにこそ本当の自由があります。「自由」「主体的決断」それは聞こえはいいのです。でも罪に支配された人間の自由や主体的決断ほど危なっかしいものはありません。そんな危険なところに救いを委ねるのでしょうか。その結果、泳げなくなる、ずっと信仰に踏み出せないかもしれないのです。

また「決断できるまで待つ」というのは、本人の判断に任せるということですが、救いは、結局は本人次第ということでしょうか。教会は、聖書から救いを示しておきながら、後は「ご自由に」というのでしょうか。よくホームセンターで本箱が売っています。出来ているのではなく、家で自分で組み立てさせるのです。神さまの救いもそうでしょうか。自分で組み立てなければならないのでしょうか。子どもにそれを買ってきて、あとは自分で組み立ててみないと親が手を出さずに傍らで見ているのでしょうか。その間にも様々な誘惑が無防備な子どもたちを襲うのです。

わたくしは、小児洗礼を受けることは「押しつけ」ではないと確信します。むしろ恵みの中で育てることです。そこには幼子を招かれた主が頭としておられます。その主に委ねて子どもと共に育まれていく。そういう交わりの中に共にいることができれば幸せです。「彼らも大人と同様に神の契約とその民に属しており、キリストの血による罪のあがないと信仰を生み出される聖霊とが大人に劣らず彼らにも確約されている」そのことを信じて神さまに委ねることができるのは心強いことです。救いの確かさはわたしたちではなく神さまにこそあるのですから。祈りをささげましょう。

あなたが相応しくないわたしをまず選んでくださることを感謝します。そこにわたしたちの救いの根拠、確かさがあります。